

新島八重と賛美歌

山下 智子

新島学園短期大学紀要 35号
(別刷)

2015年3月31日発行

新島八重と賛美歌

山下 智子

The Meaning of Hymns for Yae Niijima

Tomoko YAMASHITA

*Niijima Gakuen Junior College
Takasaki, Gunma 370-0068, Japan*

要 旨

本稿の目的は新島八重（1845-1932）の信仰生活において賛美歌が欠かせないものであることを明らかにすることである。新島八重はどのように神に賛美すること知り、そのことを通して自身の信仰を深めていったのだろうか。八重と賛美歌のかかわりに注目しながら検証する。

Abstract

The purpose of this paper is to examine the meaning of hymns for Yae Niijima. How did Yae Niijima know the way to praise God and deepen her faith through singing hymns? This paper explores an essential part of Yae Niijima's Christian life, paying attention to the influence of hymns on her.

1. はじめに

本稿は、新島八重（1845年12月1日—1932年6月14日）の信仰生活の実際を研究するものであり、特にキリスト者にとって日々の歩みの中で欠かせない賛美歌に注目し、八重の信仰生活にとって賛美歌は欠かせないものであり、信仰の成長を助け、信仰を証しするものであったこと主張する。

八重の生涯は、①襄と結婚するまでの武士の娘・山本覚馬の妹としての時代（1845年—1876年）、②新島襄の妻としての時代（1876年—1890年）、③襄の死後、篤志看護婦・茶道師範としての時代（1890年—1932年）に分けられる。この内、①の時代、八重が会津藩砲術指南の山本家に生まれ、戊辰戦争の時には男装・断髪で銃を持ち戦ったことについては八重の故郷会津を中心に比較的知られていた。その一方で②③の時代、戊辰戦争後の八重についてはあまり注目されてこなかったが、2013年のNHK大河ドラマ『八重の桜』放送にともない、戊辰戦争後の八重の生涯にも関心が寄せられるようになった。しかしそれでもなお八重が晩年まで「武士の心」だけでなく「信者の心」で生きたことには十分注意がはられなかった。またキリスト者としての八重に注意を払っているものでも、十分な根拠や資料があげられないままキリスト者としての八重が語られることが多かった。¹

これらの状況を踏まえ「新島八重の信仰」『新島学園短期大学紀要』33号（新島学園短期大学、2013）では、キリストの教えの中でも重要な「隣人愛」、特に「敵を愛しなさい」（ルカ6:35）に焦点を当て、八重の「武士の心」と「信者の心」に注目し、弟や父の命を奪った戊辰戦争時の敵に対する言動がどの様に変化したかを研究した。そして八重には、襄の妻となりキリスト者となってからも「武士の心」と「信者の心」の両方があり、時には「武士の心」が「信者の心」を上回ることもあったが、襄の闘病と早すぎる死を経験し、それ以降は次第に「武士の心」を上回る「信者の心」を持つこととなり、1910年、八重64歳時の「キリストの心をもて心とせよ」との署名によく表れているように晩年も「信者の心」を大切に歩んだことを論じた。²

このことに関連し、大河ドラマ『八重の桜』では、襄の妻となった八重が熱心なキリスト者である襄の生き方やキリスト教の考え方に影響を受けたという理解で物語が展開した。実際にドラマの中では、八重や襄が祈る場面が度々あった。また後述の通り襄は音楽的才能にあまり恵まれなかったので史実と多少異なるが、二人が讃美歌を歌い、オルガンを弾く演出も印象的であった。しかし『八重の桜』でも、全放送50回の内、襄の臨終及び葬儀が描かれたのは第48回「グッバイ、また会わん」であり、その後の放送はわずか2回と、襄の死後の八重についてはほとんど描かれなかった。

このため「八重の信仰」を踏まえ、「新島八重の祈り」『新島学園短期大学紀要』34号（新島学園短期大学、2014）では、八重が洗礼を受けて以降、武士の娘としての影

響は残しつつも生涯キリスト者として歩んだことを前提に、八重が実際には神への祈りをどの様に理解し、生涯にわたりどの様に実践していったのかを、襄との関係も踏まえて検証した。そして新島八重にとって神への祈りは、その信仰生活において欠かせないものであり、特に襄の闘病と早すぎる死を経験して以降、襄の「我心を継ぎて天下の為に祈ることを忘れ給ふ勿れ」との遺言を大切に、自分自身や身近な人々の為に祈るだけでなく、次第に他者の為に祈る者とされていったことを論じた。³

さてキリスト者の信仰生活で祈りとともに欠かせないものは賛美である。聖書にも「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい。」(ヤコブ5:13)とあり、八重の信仰を理解するうえでも賛美歌は重要なものである。よって本稿では、前述の「八重の信仰」「八重の祈り」を踏まえ、八重が洗礼を受けて以降、賛美歌にどの様に親しみ、賛美歌を通してどの様に自身の信仰を深めていったのか、また神へ賛美することの本質をどの様に知ったのかを検証する。⁴

2. 八重の賛美

キリスト者にとって神を賛美することは、信仰生活を送る上で祈ることと同様に欠かすことのできないものである。聖書にも「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」(エフェソ5:19)とすすめられている通りである。新島八重にとっても、キリスト教と出会って以降、賛美歌は生涯を通して常に身近にあった。八重が賛美歌に出会ったのは、1875年に襄と知り合い、祈りに親しむのとはほぼ同時期であったと考えられる。特に「八重の祈り」で述べたとおり、1885年8月に八重が神戸の宣教師たちのもとで一夏を過ごした際に、賛美歌を聴き親しんだことはほぼ間違いない。

この章ではキリスト者となって以降の八重の信仰と賛美のありようを示すいくつかの出来事と、晩年の八重の「神のよき友となれ」との署名を取り上げ、八重にとって賛美歌がどのような意味を持つものであったのかを見ていく。

(1) 新島美代の死と賛美歌

新島八重と賛美歌のかかわりを見ていくうえで見逃せないのは、愛する家族が亡くなるという悲しい出来事が八重と賛美歌をより近づける経験となっていることである。



結婚したころ 立っているのが襄
前列左より八重、佐久、民治、登美、美代

八重がキリスト者となって初めて家族の死に立ち会ったのは、義姉・新島美代(1838年-1879年10月23日)の死であった。美代は1879年10月23日に41歳で亡くなった。美代は新島襄の3番目の姉で、子どもの頃、襄を背負って転倒しことが原因で足が悪く、生涯未婚であった。1876年4月26日、襄の両親である新島民治・登美とともに群馬の安中から京都に来て襄夫妻と同居するようになった。やがて同年12月3日、襄夫妻の家を会堂として京都第2公会が設立されると同時に、後述の八重の姪である横井(山本)峰や八重の母である山本佐久らとともに襄より洗礼を受け第2公会の最初の会員の一人となった。

襄は美代の最期を「姉美代ノ死去ノ際ニ当リ、我等ノ聞見シタル略記」として書き残している。ここで襄が「我等」と言っているなかにはもちろん八重が含まれる。たとえば1879年10月5日に「予ハ八重ト共ニ、姉ノ此世ニ久シク存スル事ナラザル事ヲ告グ」とあり、八重は襄と共に美代への死の宣告というつらい役割を担っている。⁵

興味深いことに美代の最期は賛美歌に満ちている。美代は襄夫妻から死の宣告をされた翌日の10月6日夜、夢で白い衣を着たたくさんの天使が美しい声で賛美歌を歌うのを聴いた。この賛美歌は9番、40番で、これは襄の属する教派(組合教会)で当時用いられていた賛美歌集『さんびのうた』の9番「たのしきくには」、40番「いのるまぞたふとき」である。40番は『讃美歌21』495番「しずけきいのりの」にあたり現代でも親しまれている。それ以降、美代は賛美歌を非常に好むようになり、お見舞いに来たキリスト者には必ず賛美歌を歌ってくれるよう頼んだという。その後も美代は死が近づいていることを予感させる宗教的な夢をたびたび見たが、13日の夜には天国を示されその中を覗こうとする夢を見た。その時に46番「さかえのきみの」を歌ったという。この賛美歌の末尾の歌詞は「死なぬいのちをうるぞうれしき」である。⁶

美代は家族をはじめとする周囲の者一人ひとりに丁寧に別れをつけ、信仰者として決して騒ぐことなく平安の内に、むしろ周囲のものに信仰を勧め、励ましを与えつつ死を迎えた。特に亡くなった10月23日は、午前「十一時半ニ歌ヲ唄フ事ヲ望メリ」から、息を引き取るまで「歌ヲ唄フ事ヲ望メリ」「女学校ノ生徒ノトキニハ、必ラズ歌ヲ望メリ」という状況であった。ここで言う「歌」とはもちろん賛美歌の事である。襄の記録によると『さんびのうた』の2番「すべてのたまよ」、7番「イエスわれをあいす」(『讃美歌21』484番「主われを愛す」)、40番「いのるまぞたふとき」、46番「さかえのきみの」、5番「われをばたのまじ」、27番「なみかぜのあらき」、25番「われたびびとぞ」、50番「わがたましひを」(『讃美歌21』456番「わが魂を愛するイエスよ」)を歌っている。⁷

重要なことは美代の臨終に際して大きな役割を担ったのは襄ではなく八重だったということである。しかも賛美歌が大きくかかわっている。23日の朝、美代は死の前に

してすでに顔つきが変わっていた。襄は最愛の姉の元を離れがたく思ったが、美代自身に学校に行って責任を果たすように促され、美代が亡くなった時にはその場になかった。一方で八重はずっと美代の傍らにいた。そして美代の死の瞬間は、襄が1879年10月27日、アメリカでの恩人であるハーディ夫妻宛に書いた手紙によると次のような非常に印象的なものだった。

Two minutes before her death she asked my wife to sing one or two hymns, then passed away as if she were going to sleep.⁸

つまり美代は八重に賛美歌を歌って欲しいと頼みそのまま眠るように息を引き取ったのだ。この場には同居していた美代の両親もいたはずであり、襄の記録によるならば同志社女学校の生徒が居合わせた可能性もあるにもかかわらずである。そして美代は八重の歌う賛美歌を聴きながら天に召されたと考えられる。この事実は、1876年1月に洗礼を受けて襄の妻となり3年ほどたったこの頃には、八重が伴奏なしですぐに歌えるほど賛美歌に親しんでいたとことを示している。また死を迎えた美代にとって義妹であるキリスト者の八重が非常に頼りがいのある存在だったことが垣間見られる。

なお、この日歌った賛美歌として前述の通りの8曲が示されており、中には現代でもよく知られた賛美歌も含まれるが、いずれも歌詞をみるとイエスの受難や救い、神への信頼を歌った内容で臨終の場面にふさわしい賛美歌である。襄不在の中、思いがけず枕辺の祈りをささげる牧師のように、八重の賛美をもって美代を神のみもとへと送った経験は、美代の立派な信仰者としての姿とあいまって、八重自身の信仰にとって少なからず影響を与えたと考えるのが自然である。その場に居合わせなかった襄が美代の臨終を詳しく記録出来たのは、八重が歌った賛美歌の曲名も含め、詳細に襄に告げたからとも考えられる。

また「(3) 神への賛美」で詳しく述べるが、八重いわく「祈りの人間」だった襄は、あまり「音楽的耳」がなく賛美歌を上手に歌うことができなかった⁹。その一方で八重は、どの程度の腕前かは不明だが、ピアノやオルガンも弾けていくらか「音楽的耳」があった。美代の臨終は、美代が賛美歌を愛したことだけでなく、傍らにいたのが八重だったからこそ賛美歌に満ちた臨終となったといえる。

(2) 横井峰の死と賛美

新島美代の死に続き、1887年1月27日、新島八重は再び大切な家族、それも娘同様に愛した姪である横井峰（1862年－1887年1月27日）の死を経験することとなった。峰の死もまた八重と賛美歌を強く結びつける出来事だった。

峰は八重の兄・山本覚馬とその最初の妻・うらの娘として会津若松で生まれた。1871年八重は姪・峰と母・佐久と共に覚馬を頼り京都に移住した。うらは会津に残り覚馬と離婚したので、八重は幼い峰を姉や母のように見守る立場だった。



左より峰、宮、八重

1876年に八重が襄と結婚し、同年12月3日襄夫妻の家に京都第2公会が設立されると同時に、峰は佐久や前述の新島美代らとともに洗礼を受け第2公会の最初の会員の一人となった。また峰は1876年に同志社女学校の前身である女子塾ができると早速そこで学びはじめ、同志社女学校草創期の学生となった。八重は女子塾時代からしばらくの間、草創期の女学校で礼法などを教えていたので、峰は八重にとって可愛い学生の一人でもあった。

峰は1881年5月20日に襄の教え子で熊本バンドの一人であった横井時雄と結婚し、愛媛の今治教会において牧師の夫を支え、1884年には長女が与えられた。なお襄が前述の美代の危篤をつげる電報を受けとったのは今治教会の設立式と横井の按手礼式に臨んでいる時であった。

峰は1886年に同志社の教員となった横井とともに京都に戻り、1887年1月20日に長男を出産したが産後の経過が思わしくなく、1月27日に24歳の若さで亡くなった。襄はその死を惜しみ、1月28日に同志社礼拝堂で行われた葬儀の際には、峰は「果然タル女丈夫ナリ 男子ナレハ必ず伝道士タリシナラン」と語り、その忍耐強い人柄や、死に際しても揺るがなかった信仰をたたえている。¹⁰

八重が娘同様であった若い峰の死という悲しい出来事を、どの様に受け止めようとしたかということに関して、興味深い証言がある。同志社英学校で学び小説家となった徳富蘆花が『黒い眼茶色い目』という自伝的告白小説の中で、峰の死に直面した八重の様子を次のように記しているのだ。

日が暮るゝと、江見君が宰領で病院から窃と御苑を通つてお稲さんの柩を昇いで来た。寒冷紗で掩ふた柩の前に、又雄さんはじめ一同集つて祈祷讚美をした。実子がないので本当の女の様にして居た姪に死なれて、其亡骸の番人で、もあるように柩を背にして一人正面に坐つた飯島の夫人は、油ぎつた赤い顔に流るゝ涙を拭きもせず、やけになった様な大声に讚美歌を歌ふた。(下線山下)¹¹

ここに出てくる「江見君」は熊本バンドの一人で横井の妹・宮の夫であった海老名弾正、「お稲さん」が峰、「又雄さん」が横井、「飯島の夫人」が八重である。『黒い眼茶色い眼』は蘆花が同志社在学中の1886から1887年に八重の姪であり峰の異母妹にあたる山本久栄との間に引き起こした恋愛事件を踏まえ、約30年たった1914年に発表された小説である。自伝的告白とはいえ長い時間がたってから記されたことや、小説であること、失恋の遺恨ゆえにか蘆花が八重を好意的には描かないことを考慮しなくてはならないだろう。しかし蘆花は同志社に入学する前、今治で横井夫妻の元に身を寄せており、京都に来てからも横井家に親しく出入りしていたことを踏まえると、峰の死に関してはかなり正確に記憶されていたであろう出来事といえる。実際、蘆花が小説の中に記している葬儀の追悼説教は裏が残した説教の草稿と一致して、これを補うものである。だとすると、八重が峰の死に際し、流れる涙をぬぐうことなく大きな声で懸命に賛美歌を歌う姿も信憑性がある。

峰は10代の多感な時期を同志社女学校などキリスト教的な雰囲気の中で過ごし、その人格形成と共に信仰を養ったキリスト者であり、『黒い眼茶色い目』によるならば日常生活の中でも「When He cometh, when He cometh, to make up His jewels」と英語の賛美歌が自然に口からこぼれたという。そんな峰は同志社病院で亡くなるが、その臨終に際しても愛唱の賛美歌を最後の力を振り絞り歌い、周囲のものに強い感動を残した。蘆花によるとその様子を裏は葬儀の際にこのように語っている。

医者が死の宣告を下しますと、稲子は深い悲哀に沈みました。愛する良人を残し、四歳の幼女を残し、生まれたばかりの赤児を残して独り先立つことを悲しんだのであります。然し稲子は直ぐ決心を致しました。而して良人をはじめ周囲の人々に一々懇ろな告別を致し、其平生愛吟した讚美歌第十六番「神我城なり、我力なるぞ」を歌ひはじめました。周囲の者は皆涙に暮れて、一人も満足に歌へる者はありませんでした。然し稲子は非常の苦痛を忍んで終わりまで明瞭な声を以て立派に歌ひ終わりました。¹²

八重は峰が死に際して蘆花の名を呼んだことを蘆花に伝えているので、八重も病院で峰を看取ったと考えられる。だとするならば、八重も涙にくれて満足に歌うことのできなかった一人である。そんな中、八重にとって娘同様の峰が死の苦しみに耐え賛美歌を立派に歌いきり亡くなったということは、峰の死が前述の美代の死以上に八重の信仰や賛美の姿勢に大きな影響を持つ出来事となっても不思議ではない。

峰が歌ったのは1882年に発行された組合教会の賛美歌集『讚美歌并楽譜』の16番「神はわがしるなり」であり、「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難

のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」との言葉で始まる詩編46篇を踏まえた歌詞の賛美歌である。¹³

八重がその後前述のように自宅に戻った峰の柩の前に「やけになった様な大声」で賛美歌を歌っていたのは、峰が死に臨み力を振り絞って賛美歌を歌った事や、その歌詞の内容と無関係ではなく、むしろ苦しみの中でなお神に信頼し賛美する信仰者の姿勢を峰に学び、最愛の姪を天に送る際の自分の姿勢としようとしたとも考えられる。

非常に興味深いのは八重が「亡骸の番人で、もあるよう柩を背にして一人正面に坐った」という点である。その他の人々が棺に顔をむけ座っている中で、蘆花はこの八重の体の向きを不思議に思ったようだが、これは会衆に対する牧師や司式者の体の向きである。つまり八重はこの時この様に賛美歌をリードして歌うことで、悲しむ人々の輪の中で積極的な信仰者としての役割をとろうとしていたことが分かる。

また蘆花は八重が賛美歌を歌う様子を、「油ぎつた赤い顔に流るゝ涙を拭きもせず、やけになった様な大声に讃美歌を歌ふた」と表現し、周囲をはばからない見苦しい姿、耳障りな声だった受け止めている。しかし前節で述べたように賛美歌を歌うことに慣れ親しんでおり、むしろ得手としていたのではと思える八重が、その様に見苦しい、耳障りと思われかねないような大声で泣きながら賛美歌を歌ったということは、大きな悲しみに加え、次節に詳しく述べるとおり、この頃には人がどう思うかではなく神に対して賛美をする姿勢が最も大切だと考えるようになっていた可能性もある。

(3) 神への賛美

八重にとって賛美歌を歌うことは、キリスト者として人生の中で、特に愛する者の死といった困難な出来事の中で欠かせないものであった。では八重にとって望ましい賛美の姿勢とはどの様なものだったのだろうか。八重の賛美歌を歌う姿勢は、襄の賛美の姿勢を通して次第に、人に上手だと評価されるように歌うことから、神を賛美することに变化した。

1924年1月20日、襄没後34年目の記念会が同志社において行われた際、八重は襄の賛美にまつわる話を紹介した。八重によると襄は「元来音楽的耳を持合はさない」という。この時もまず「二尺余の黒の横笛」を手に、襄が5カ月の練習の後ついに習得を断念した笛であることを説明し、「学校へ寄付しようと思って持ってきた」と語った。¹⁴

さらに八重は襄が亡くなる頃まで愛用した古い賛美歌集を手に、大津の漢学塾で伝道した際に音楽を苦手とする襄が賛美をリードしたところ、会場にいたのが漢学生だったこともあり、詩吟の大合唱の様な滑稽なことになってしまったことを語り、このことは襄にとっても忘れられない出来事だったようで襄の賛美歌集にはその時歌った25番に△印がついていると説明した。

なおこの八重の談話を口述筆記した記録によると襄愛用の賛美歌集は「(明治)十七年頃出来たもの」で賛美歌の歌詞は「あまつちのかみへわがいのりをきゝたまへ」となっているが、正確には賛美歌の番号と歌詞から1882年発行の『讚美歌并楽譜』の25番「てんちのかみよわがいのりをききたまえ」であると判断できる。

興味深いのは大津での出来事に続けて、八重が襄の賛美歌集を手にしたまま語った、賛美に関する襄の姿勢を示す以下の出来事である。これは八重が賛美をどの様に理解し、どの様に行うかという点で大きな示唆を与える出来事だったと考えられる。

襄が教会で唄ひます時も相変わらずで、いつか私が注意致しますと、襄は、神に向つて賛美してをるのだ、人に向かつて唱つてをるのではないと、平気で語りました。¹⁵

ここからわかるように、八重は襄と共に教会に通い、賛美歌を歌うたびに、襄の歌声がひどく調子外れであることを気にしていた。八重は襄よりも「音楽的耳」を持っていたのだ。なるほど、八重は襄と結婚後、キリスト教の賛美に欠かせないオルガンやピアノなどの鍵盤楽器を習い、ある程度それを自分のものにしていった。新島邸の居間にはオルガンが置かれているし、また1880年に京都府学務課員が同志社女子校を視察にした際の記録には「洋琴ヲ弾ス新島襄ノ妻ナリ」とある。洋琴とはピアノの事である。¹⁶

また、ある時、同志社の学生であった古河快象（鶴次郎）がクリスマスに自作の詩を吟じた際には、「古賀サンは讚美歌はダメダガ吟詩は本物ですね」と冗談交じりに親しく声をかけ、古賀を得意にさせている。ここでも八重は古賀が日ごろ賛美歌を歌う声を聞き分けていたことが伺える。¹⁷

八重は襄の歌う賛美歌に関してもある時までは「ダメダ」と考えており、ある日の礼拝で余りにも聞くに堪えないのでついに襄に注意した。しかしこの時襄は八重に「神に向つて賛美してをるのだ、人に向かつて唱つてをるのではない」と平然と答えた。これは八重に賛美の重要な側面に気付かせる言葉だった。八重が襄の賛美は「ダメダ」と考えたのは、あくまでもこの世の音楽的な基準によるもので、人が襄の歌声を聞いた時にどう評価するかによっていた。この時の八重にとって良い賛美とは、人が「上手」と判断する歌声だったのだ。そして人が「下手」と判断する歌声は、恥ずかしいもの、はばかるべきものだった。しかし襄は賛美というものは第一に「神に向かつて」なされるものであり、それゆえに人が歌声をどう思うかは関係ないことを示した。そして実際に調子はずれなまま堂々と歌い続けたのである。

この世的にはどんなに下手な歌でも、神の前にすばらしい賛美ということがあり得

るということは、八重にとって新鮮な考えだったはずである。たとえば、八重は会津時代に砲術を学んだが、砲術の世界ではまったく的にあたらないのに素晴らし一撃ということは決してない。八重にとって裏の賛美に対する姿勢が深く心に刻まれたことは、この話が裏の死後34年たった記念会の時に語られていることからわかる。加えて八重はこの時の話を「私もお暇乞する時が近づいたと思いますが、この讚美歌と写真とは棺に入れやうと思つてみます」と締めくくっている。横笛を同志社に寄贈しようとしているのに対して、裏の賛美の姿勢とそれを思いおこさせてくれる裏愛用の賛美歌集を八重がそれほど大切に思い、死んだ後までも常にそばに置いておきたいと願っていたことがわかる。¹⁸

裏の賛美の姿勢を示す礼拝での出来事が、いつ頃の事であったのかは不明だが、裏が亡くなる時まで愛用した賛美歌集が1882年に発行されたもので、1887年に峰が亡くなった際に用いられたことや、裏が亡くなったのが1890年である事を考えると、峰が亡くなった頃にはすでに八重が神への賛美において何が最も大切なのかを裏の賛美の姿勢から学んでいたとしても不思議ではない。

(4) 八重の愛唱賛美歌

裏の死後、八重が「信者の心」「祈り」を大切に生きたことは「八重の信仰」「八重の祈り」で論じたとおりだが、裏の死後、八重と賛美歌のかかわりはどの様なものだったのだろうか。八重の愛唱賛美歌は274番「いつくしみふかき」と128番「うつりゆく世にも」である。これらの曲番は1931年発行のプロテスタント各派共通の賛美歌集である讚美歌委員会編『讚美歌』によるものである。八重は1932年6月14日に86歳で亡くなったが、その後6月17日に同志社栄光館で行われた葬儀の際にもこの2曲が愛唱賛美歌として歌われたことから、八重が裏の死後も賛美歌に親しみ自身の信仰にとって不可欠のものとしていたことがわかる。¹⁹

「いつくしみふかき」は現在では「みめぐみゆたけき」という異なる歌詞で歌われており、『讚美歌21』の461番にあたる。「うつりゆく世にも」は、『讚美歌21』の299番にあたり、現在でも「うつりゆく世にも」という歌詞で歌われているが5節あったものが4節になり歌詞も多少異なる。²⁰

八重の愛唱賛美歌に関して興味深いのは、この2曲は裏が亡くなる頃まで愛用した1882年発行『讚美歌并楽譜』には含まれていない事である。正確には、「うつりゆく世にも」は裏も愛用した『讚美歌并楽譜』の94番「うつりゆく世にも」、その後1888年に発行され、組合教会と一致教会が協力してつくった賛美歌集『新撰讚美歌』の166番「うつりゆく世にも」としてほぼ同じ歌詞で掲載されているが、これらは八重の葬儀で歌われた讚美歌とは曲が全く異なっている。愛唱賛美歌とされるには、歌詞

はもちろんだが曲も重要である。ゆえにこの歌詞に八重の共感があったことは間違いないが、襄が生きていた時にはまだ八重の愛唱賛美歌とはいえなかつただろう。「うつりゆく世にも」が八重の葬儀で歌われた曲となるのは、その後1903年にさらに多くのプロテスタント各派が協力してつくった賛美歌集『讚美歌』の81番「うつりゆく世にも」からである。²¹

また「いつくしみふかき」は1882年発行の『讚美歌并楽譜』には掲載されておらず、組合教会で用いられた讚美歌集としては、1888年に発行された『新撰讚美歌』になり初めて173番「いつくしみふかき」として、八重の葬儀で歌われたのとほぼ同様の歌詞と曲で掲載されている。

つまりここから言えることは、この2曲の愛唱賛美歌は、襄の死後の八重の信仰を示すものであるということである。襄の愛唱賛美歌であったから八重も愛唱したというような消極的な理由による愛唱賛美歌ではなく、八重が最愛の襄の死後一人で歩まなければならない状況の中で、これらの賛美歌の歌詞と曲にキリスト者として深く共感して積極的に愛唱したのである。

襄の死後の八重の教会生活や信仰生活に関しては否定的な見解も聞かれるが、八重が亡くなった時点で「うつりゆく世にも」と「いつくしみふかき」を愛唱賛美歌としていること自体が、襄の死後も八重が教会生活を続け、組合教会で用いられる賛美歌集が新しくなるごとに新しい賛美歌に親しみ、それを自分の信仰生活の一部としていたことの一つの証である。

八重の葬儀の際に、襄の教え子で八重も親しかった山室軍平が追悼説教の中で八重の愛唱賛美歌「いつくしきふかき」の1節、「うつりゆく世にも」の4節の歌詞を取り上げ、八重の晩年の信仰生活を次のように語っている。

夫人が晩年、いかに円熟した信仰生活を営んで居られたかに就ては、「順序書」に載せられた故人愛誦の讚美歌二首は、之を語つて余りがあると思ひます。いつくしみふかき／主の手にひかれて／このよのたびぢを／あゆむぞうれしき／いつくしみふかき／主のともとなりて／御手にひかれつゝ／あめにのほりゆかん／と云ひ又、／十字架のうへより／さしくるひかり／ふむべきみちをば／てらしておしふ／と言う言葉の如く、夫人は主イエスの御手にひかれつゝ、十字架の上より射し来る光に照らされて、この世の旅路を続けられたのであります。(下線山下)²²

八重は晩年、茶道を通じ建仁寺の僧侶・竹田黙雷と親しく交流したことから仏教への改宗がうわさされたこともあったが、八重と親しかった山室はそうしたうわさをはっきり否定し、八重の愛唱賛美歌がその信仰の生涯を「語つて余りある」証拠であり、

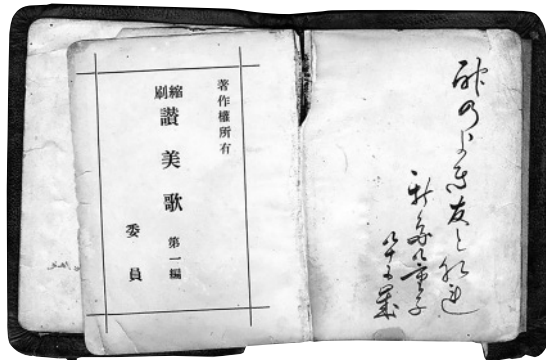
八重は「主イエスの御手にひかれつゝ、十字架の上より射し来る光に照らされて、この世の旅路を続けられた」のだと断言した。

八重自身も、新島襄の教え子である柏木義円が発行していた『上毛教界月報』の1931年1月20日発行386号の誌上で、こうした疑惑が誤報であり遺憾だとしたうえで、自身のキリスト教信仰が揺らいではない事を「私は基督教信者として同志社教会に属し来り今後も永久会員として教会に出席仕る心得に御座候 又毎日聖書を拜読して祈祷を捧げつゝ、道後の日を送り居る者に御座候」と明らかにし「薄信不肖乍ら依然基督教徒にて有之候間此義御諒承被成下度念の為申上候アーメン」としている。²³

つまり八重は、戊辰戦争から、襄と歩んだ時代、その後の時代へと「うつりゆく世」をしみじみと実感する中で、常に「いつくしみふかき」神を信頼し歩んでいた。だからこそこれらの賛美歌を愛唱するに至ったのである。

(5) 神のよき友となれ

八重にとって「神に向つて賛美」するとは神を賛美する歌を歌うだけでなく、次第に神を賛美する生き方をすることとなっていた。この点に関してさらに理解を深めるために、八重の愛唱讚美歌「いつくしみふかい」と晩年の八重が残した署名を合わせて見ると非常に参考になる。



八重は晩年に賛美歌の見開きに「神のよき友となれ 新島八重子 八十五歳」との署名を残している（新島学園蔵）。賛美歌の持ち主は、襄の教え子であり、その頃は八重も属する同志社教会の牧師となっていた堀貞一である。八重は自身の年を亡くなるまで「数え」で表していたので、満83歳、亡くなる3年前の1929年の署名と考えられる。

「神のよき友となれ」とは、この言葉だけでも十分力強いが、これが賛美歌の見開きに書かれたものであることから賛美歌と関連付け理解をすることがよりふさわしい。特に前述の通り八重の愛唱賛美歌「いつくしみふかい」のくりかえし部分には「主のともとなりて」との歌詞があり、八重はこれを踏まえ「神のよき友となれ」と記した可能性がある。

「主」とは、「主人」の「主」であり、神や神の子イエス・キリストに用いられる敬称である。そのため「主のともとなりて」とは「神のともとなりて」と読み換えられる。また「いつくしみふかき」は主イエスにより示されるいつくしみに満ちた神の御手に導かれ人生を歩む幸いを歌った賛美歌であるため、「とも」は「供」と理解す

ることできる。英語の原詩では「主のともとなりて」の部分は「His faithful follower I would be, / For by His hand He leadeth me.」となっている。八重が使用した賛美歌集での歌詞は「とも」と平仮名で記されているため、翻訳者がどのような意図の「とも」としてこれを訳したか正確にはわからない。しかし、八重はこの言葉をより積極的に「友」と理解し、自分自身のキリスト者としての生き方に結び付けていたと考えられる。

すでに「八重の信仰」で詳しく述べたとおり、八重は襄との生活を経て、襄が亡くなる頃には次第に戊辰戦争の敵ともいえる薩摩の人にも愛をもって接するようにならされていった。襄の死後は日清日露戦争で篤志看護婦として苦しむ人々を支え、茶道を通し僧侶である建仁寺の竹田黙雷と対話するなどの目立った活躍があった。これらの活躍は片や宝冠章をもたらし称賛され、一方では改宗疑惑をもたらし非難されたが、いずれも八重ならではの大胆で型破りなキリスト者として活躍であったことは確かであり、「武士の心」だけではなくそれを上回る「信者の心」で「キリストの心」を自らの心にしようと志した八重の信仰に裏打ちされたものであった。

八重の信仰は神のいつくしみにすがり「供」としてただついていくような消極的なものではなく、神のいつくしみを喜び、感謝して、自らすすんで「友」となり神に伝えていくような積極的なものだった。こうした姿勢は「いつくしみふかき」に示されるような神の愛の御手への八重の確信に裏付けされていると考えられる。なるほど「いつくしみふかき」は襄の亡くなった頃に発行された賛美歌集『新撰讚美歌』に掲載された賛美歌である。八重にとって最愛の襄の死というもっともつらい経験のさなかで出会ったこの賛美歌は、神への信頼を深めて希望をもたらし、さらには困難を乗り越えた後に困難を神の愛の御手への確信へと変えたのだろう。

山室軍平は八重の愛唱賛美歌「うつりゆく世にも」4節を踏まえ八重が「十字架の上より射し来る光に照らされて、この世の旅路を続けられた」と語ったが、「うつりゆく世にも」の2節の歌詞は「聖書のひかりは／つみをあがなふ／十字架のうへにぞ／みなあつまれる」である。キリストの十字架の上から射し来る救いの光に照らされるには、キリストの生涯や言葉を記した聖書の光にてらされる必要があるのだが、八重のキリスト者としての積極的な生き方に重なりあう、次のようなキリストの言葉がある。

もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残

るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。(ヨハネ15：15—17)

八重はキリストにより自分を「友」と呼んで下さる神に対して、自ら進んで互いに愛し合う生き方を志していくことで自らも「神のよき友」となり応答しようとした。その結果としてさらに神の愛の御手の導くままに篤志看護婦として傷つき苦しむ人々を前に涙を流しながら仕え、改宗したとの心ない非難にも動じず他の宗教への理解を深め立場が違うものとも共に歩む道を模索したと考えられる。

困難な状況にある人々を思いやり助けあうことに関して「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ25：40)とのキリストの言葉もあるが、八重は「出会う人々のよき友となる」ことで「神のよき友となる」ことを志した可能性が大きい。

このように八重にとって愛唱賛美歌は、「神のよき友となれ」との署名と合わせ、襄の死後、八重が襄の影響を受けつつも、彼女らしい信仰を持つに至ったことをよく表すものであるといえる。

3. おわりに

以上述べてきたように、新島八重の信仰生活において賛美歌は欠かすことのできない重要なものであり、八重の信仰を深め、八重の信仰を証しするものである。八重は夫である新島襄の大きな影響を受け、襄の死を境に次第に敵を愛し、他者の為に祈るものとされた。また賛美歌を歌う声や音程の善し悪しを気にするものではなく、賛美歌に歌われているような神に賛美する生き方を志すものとされた。

これらのことに関連して、襄と共に同志社で教えた宣教師のD・W・ラーネッドが1910年の襄没後20年の記念会で襄の信仰について興味深いことを語っている。「讚美歌の『いつくしみふかき主のともとなりて御手にひかれつゝ天に昇りゆかん』といへる句は、能く先生の信仰を描写して」いるというのだ。すでに述べたように「いつくしみふかき」は八重の愛唱賛美歌である。²⁴

なるほど、襄にとって「神の御手」は重要な信仰のキーワードである。八重は、襄のように自身の信仰について述べ、書き記すことはほとんどなかった。しかし八重の愛唱賛美歌を検証することにより、八重は特に襄の死後、襄が信頼していた神の愛の御手に深い信頼をおき、彼女らしく信仰をもって生きたのだといえる。襄は八重と婚約した時に彼女を「she is a person who does handsome」「美しい行いをする人」と表現した。八重の美しい生き方は、クリスチャンとなり襄の妻となったことで、より

磨れていった。襄が早くに亡くなったため、八重はその後の42年間を一人で生きたが、その長い歩みの中で、さらに八重の信仰は、襄の影響をうけつつも単なる襄の信仰の模倣ではなく八重らしいありかたに深められたたといえるだろう。

なお、本稿では襄が亡くなった時に八重がどのような賛美歌をどのような態度で歌ったか、またそのことが八重の信仰にどのような影響を与えたかを検証することができなかった。襄の信仰にとって賛美歌が持つ意味と合わせ今後の研究の課題としたい。

- 1 キリスト者としての八重に十分注意を払ったものとして、雑賀信行『牧師夫人新島八重』（雑賀編集工房、2012）、山下明子「凛として生きるークリスチャンの八重」同志社同窓会編『新島八重 ハンサムな女傑の生涯』（淡交社、2012）、本井康博『八重さん、お乗りになりますか』（思文閣出版、2012）、同『襄のライフは私のライフ』（思文閣出版、2014）、山下智子『新島八重ものがたり』（日本キリスト教団出版局、2012）などがある。この内『牧師夫人』は襄の生前に関しては比較的丁寧に資料をあげている点は評価できるが、襄の死後についてはほとんど語られてない。「凛として」はジェンダーの視点からキリスト者としての八重の生涯を論じた点や、晩年の八重を「対話型」のキリスト者としている点が評価できるが、資料による裏付けが少なく、若干説得力に欠ける面がある。『八重さん、お乗りになりますか』、『襄のライフは私のライフ』、『新島八重ものがたり』は晩年の八重のキリスト者としての姿も新出の資料も用い比較的丁寧に論じている。
- 2 山下智子「新島八重の信仰」『新島学園短期大学紀要』33号(新島短期大学、2013)、25-26頁。
- 3 山下智子「新島八重の祈り」『新島学園短期大学紀要』34号(新島短期大学、2014)、33-44頁。
- 4 日本聖書協会『新共同訳 聖書』、後出の聖書からの引用も同様。
- 5 同志社社史資料室『新島襄全集5』（同朋舎、1984）84-86頁。
- 6 カーチス編『さんびのうた 明治12年版』9、40番、手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成20』（大空社、1996）。讃美歌委員会編『讃美歌21』（日本キリスト教団出版局、1997）495番。なお明治12年版は40曲を収めたデフォレスト編の明治8年版を増補改訂したもので、さらに23曲を加えた63曲が収められている。
- 7 『さんびのうた』2、5、7、25、27、46、50番。『讃美歌21』456、484番
- 8 同志社社史資料室『新島襄全集6』（同朋舎、1985）201-202頁。
- 9 永沢嘉巳男編『新島八重子回想録』（大空社、1996）75頁。
- 10 同志社社史資料室『新島襄全集2』（同朋舎、1983）252-254頁。
- 11 徳富蘆花「黒い眼と茶色い目」、笹淵友一、佐古純一郎編『近代日本キリスト教文学全集2』（教文館、1975）、45頁
- 12 同上、48頁。
- 13 カーチス編『讃美歌并楽譜 第2版』（美國派遣宣教師事務局、1882）、16番、手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成21』（大空社、1996）。
- 14 同志社社史資料室『追悼集Ⅱ—同志社人物誌 明治41年～大正4年』（同志社社史資料室、1988）、293-294頁。
- 15 同上、294頁。
- 16 吉海直人『新島八重愛と闘いの生涯』（角川学芸出版、2012）、40頁。
- 17 同志社社史資料室『追悼集Ⅵ—同志社人物誌 昭和10年～昭和12年』（同志社社史資料室、

- 1988), 396頁。
- 18 『追悼集Ⅱ』245頁。
- 19 讃美歌委員会編『讃美歌』(讃美歌委員会, 1931), 128, 274番。
- 20 『讃美歌21』299, 461番
- 21 讃美歌委員会編『新撰讃美歌』(1890), 手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成22』(大空社, 1996)。なお『新撰讃美歌』は1888年に歌詞のみで発行され, 1890年に楽譜つきで発行された。讃美歌委員会編『讃美歌』(1903), 手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成23』(大空社, 1996)。
- 22 『追悼集V—同志社人物誌 昭和7年~昭和9年』(同志社社史資料室, 1991) 73—74頁。
- 23 『上毛教界月報 復刻版10』(不二出版, 1985) 12頁。
- 24 同志社社史資料室『追悼集Ⅰ—同志社人物誌 明治10年~明治40年』(同志社社史資料室, 1988) 131頁

<参考文献>

- 雑賀信行『牧師夫人新島八重』(雑賀編集工房, 2012)
- 讃美歌委員会編『讃美歌』(讃美歌委員会, 1931)
- 『上毛教界月報 復刻版10』(不二出版, 1984)
- 手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成20』(大空社, 1996)
- 手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成22』(大空社, 1996)
- 手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成23』(大空社, 1996)
- 同志社社史資料室『追悼集Ⅰ—同志社人物誌 明治10年代~明治40年』(同志社社史資料室, 1988)
- 同志社社史資料室『追悼集Ⅱ—同志社人物誌 明治41年~大正4年』(同志社社史資料室, 1988)
- 同志社社史資料室『追悼集Ⅳ—同志社人物誌 昭和10年~昭和12年』(同志社社史資料室, 1993)
- 同志社社史資料室『追悼集Ⅴ—同志社人物誌 昭和7年~昭和9年』(同志社社史資料室, 1991)
- 同志社同窓会編『新島八重 ハンサムな女傑の生涯』(淡交社, 2012)
- 徳富蘆花「黒い眼と茶色い眼」, 笹渕雄一, 佐古純一郎編『近代日本キリスト教文学全集2』(教文館, 1975)
- 永沢嘉巳男編『新島八重子回想録』(大空社, 1996)
- 新島襄全集編集委員会『新島襄全集2』(同朋舎, 1983)
- 新島襄全集編集委員会『新島襄全集5』(同朋舎, 1984)
- 新島襄全集編集委員会『新島襄全集6』(同朋舎, 1985)
- 日本基督教団讃美歌委員会『讃美歌21』(日本基督教団出版局, 1999)
- 日本聖書協会『新共同訳 聖書』(日本聖書協会, 1987)
- 本井康博『ハンサムに生きる』(思文閣出版, 2010)
- 本井康博『八重さん, お乗りになりますか』(思文閣出版, 2012)
- 本井康博『八重の桜, 襄の梅』(思文閣出版, 2013)
- 本井康博『襄のライフは私のライフ』(思文閣出版, 2014)
- 山下智子『新島八重ものがたり』(日本キリスト出版局, 2001) 113頁
- 山下智子「新島八重の信仰」『新島学園短期大学紀要』33号(新島短期大学, 2013)
- 山下智子「八重八重の祈り」『新島学園短期大学紀要』34号(新島短期大学, 2014)
- 吉海直人『新島八重 愛と闘いの生涯』(角川学芸出版, 2012)